

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 鈴木 里香

本論文は、近代ドイツ語文学において看過しがたい位置を占めている作家フランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883-1924) の幾篇かの主要な作品をとりあげて、「パフォーマンス」の概念を軸にしつつ論じたものである。

筆者は、未完の長編小説『失踪者』(1912-14)を「法廷の場面に始まり芸術の場へと至る物語」と定義する。アメリカへの移住船の中でおこなわれる裁判と、主人公が劇団員として採用されて列車で向かう先に待ちかまえている「オクラホマの野外劇場」とのあいだには、さしたる連関が存在しないようにみえながら、そこに「法」と「芸術」という、「パフォーマンス」において通底する範疇が読みとれるとする指摘は、それ以降の章における展開を導くうえで、きわめて有効である。カフカのすべての作品に見受けられる、登場人物のなにげないしぐさ、身振りからはじまって、「裁判所」や「城」といった不可視の組織の存在を示唆するにいたる、さまざまな記号による指示作用を最終的に解読する場として、「オクラホマの野外劇場」を理解したベンヤミンとは異なって、筆者は、それを「様々な志向性が集まる、可能性を含んだ場」と解釈する。こうして得られた知見をもとにして、第2章「法のパフォーマンス」はやはり未完の長編小説『審判』(1914-15)の、第3章「芸術のパフォーマンス」は短篇小説『断食芸人』(1924)の、それぞれの解釈にあてられることになる。そこで繰り返し明らかにされるのは、記号の指示作用の齟齬であり、あるいは指示されるはずの何らかの「実体」の不在である。かつてバイスナーによって指摘された、カフカにおける語り手のパースペクティブの一義性とも相俟って、そこには、こうした関係性の領域を宙吊りにする戦略が機能している。それに関連して、最後に第4章で企図されるのは、短篇小説『流刑地にて』(1914-19)の中に、単に作品の主題たるをこえて、メタ・レベルにおいて作者の行為として機能している「パフォーマンス」を、内在的読解をとおして現前せしめることである。すなわち、判決文を囚人の身体に書きこんでいく独特の「処刑機械」において、「芸術的領域と法的領域が不可分な形で統合」されるばかりではなく、作品を「書くこと」においてこそ、それが遂行されているというのである。

筆者は、個々の作品の構造分析に意をもちつつ、カフカの創作活動を展開させている動因をよく明示しえているといえよう。汗牛充棟の様相を呈するカフカ研究にあって、その作品の演劇的な性格については、すでに先行文献が存在するが、それをさらに「パフォーマンス」のテーゼにまで発展させた論考は、ドイツ語圏においても例をみない。

本論文は、細部においてややもすると牽強付会におちいる観があり、その点はいささか憾みなしとしないが、参考文献を博搜しつつ、首尾一貫した論理を構成しえた力量は、十分に評価されるべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。